

## 秀 賞



### 私の目指す場所

宮城県仙台市立台原中学校

三年 阿部 聖 菜

「私、先生みたいな人になりたいです。声が震えていた。やっと思つた私の目指す場所。もう諦めない、逃げたりなんかしない。「そっか。」そう、先生は微笑を浮かべながら私の頭を撫でた。その言葉を聞いて、全身の力が抜けていくのが分かった。いつか絶対、先生に追いついてみせる。そう心に誓った。」

昔から私には夢がなかった。小説家、教員、放送作家。なりたいたいと思う職業はたくさんあったのに、いつも「私なんて無理だ」と思い、諦めてしまう。他の友達やクラスメイトはみんな夢を見つけている。スタートはみんな同じなのに私だけまだゴールを見つけれれていない。そんな自分が大嫌いで、劣等感を抱いてしまう毎日だった。そしてついに、やりたい職業も叶えない未来も見つけられなくなっていた。周りに言われた通りの道を進もう、自分の感情なんて押し殺してしまおう。そんな事ばかり考えるようになっていった。

私が夢を見つけたのは小学校を卒業して、中学校に入ってからだった。そしてそこで、私に夢を与えてくれた存在に出会った。「中学校といえは受験だよ、嫌だな。」

クラスメイトの誰かが言った。「受験」その言葉の重さで、押し潰されそうだった。中学校でも私は夢を見つけれられないのだろうか、周りに言われるがままの人生を歩むのだろうか。私は一人、思い悩みながら席に着いて、新しい学級担任の先生が来るのを待った。教室に入ってきたのは、私より身長が低くて小柄な女の先生だった。

「今日から君たちの担任をします。よろしくね。」一番前で先生の話を聞いていた私は、勝手に運命を感じていた。かっこよかった。その先生とは会って一日もたっていないのに、憧れの存在となっていた。

私が思っていた通り、先生は素敵な人だった。授業も分かりやすく、優しく、怒る時はしっかりと怒ってくれる。完璧な人だった。私とは正反対で、なんでもできる先生。私も先生みたいな人になりたいな、そう思うようになった。だが、いつものように諦めてしまった。ドラマや小説で、憧れの人のようになるために努力し、成長していく主人公。そんな物語はたくさん見たことがあるが、その物語の主人公と私とは、意志の強さが全然違う。私の憧れの感情は、本物ではないかもしれない。そう感じてしまい、また夢を諦めてしまった。ある日の放課後、私は日直の仕事で先生と二人きりになった。学級日誌を書いている私に、先生はこう話しかけた。「聖菜、悩んでる事があったら一人で抱え込まないで。いつでも私に相談してね。」

私は驚きを隠せなかった。まるで私の心を見透かさされているようで、先生にはすべてバレてしまいうさで。「悩みなんてないですよ。」と、私はウソをついた。だが、そのウソもバレてしまいうさで、急いで仕事を終わらせて教室を出た。次の日、先生にまたその話題を出されることもなく、一年が過ぎていった。

先生は、一年生、二年生、三年生と私の担任だっ

た。そして、三年生となって初めての登校日。私はまた、先生と放課後二人きりとなった。そして先生は私にこう話しかけた。

「聖菜、夢はある？」

「夢はあります。でも……。」

言えなかった。自分の夢に自信が持てなかった。笑われるのが怖くて、無理だと言われるのが嫌で。

「私には、無理だと思っんです。」

そう私が言った瞬間、先生が眉をひそめた。そして先生は、ゆっくり口を開いた。

「無理だと思っんですって、誰でも最初は無理なの。そこから努力して努力して、夢を叶えた人だっったくさんいるの。そんな最初から無理だなんて間違ってる。」

その時私は、自分が間違えてる事に気付いた。黙っている私に、先生は悲しそうな顔をして言った。

「もっと私を頼ってほしい。もっとあなたの事を教えてほしい。私を信じてほしい。」

私はそれを聞いて、ここで諦めたら絶対後悔すると思っった。

「私、先生みたいな人になりたいです。」

私の目指す場所は、今日の前にいるこの人だ。

「それが、私の最初の夢です。」

先生に認めてもらいたい。先生のようにになりたい。その時、私の憧れの感情が本物になったのだ。私の一番最初のゴールで待つててください、先生。いっ

か必ず、追いついてみせます。